

十月の末

宮沢賢治

青空文庫

嘉^かツコは、小さなわらぢをはいて、赤いげんこを二つ顔の前にそろへて、ふっふつと息をふきかけながら、土間から外へ飛び出しました。外はつめたくて明るくて、そしてしんとしてゐます。

嘉ツコのお母さんは、大きなけらを着て、繩^{なは}を肩にかけて、そのあとから出て来ました。

「母^が、昨夜^あ、土^あ、凍^{ゆべ}みだぢやい。」嘉ツコはしめつた黒い地面を、ばたばた踏みながら云^いひました。

「うん、霜あ降つたのさ。今日は畑あ、土あぐぢやぐぢやづがベもや。」と嘉ツコのお母さんは、半分ひとりごとのやうに答へました。

嘉ツコのおばあさんが、やつぱりけらを着て、すっかり支度を
して、家の中から出て来ました。

そして一寸手をかざして、明るい空を見まはしながらつぶや
きました。

「爺んごあ、今朝も戻て来ないがべが。家であこつたに忙がしで
ば。」

「爺んごあ、今朝も戻て来ないがべが。」嘉ツコがいきなり叫び
ました。

おばあさんはわらひました。

「うん。けづな爺んごだもな。酔たぐれでばかり居で、一向仕事
助けるもささないで。今日も町で飲んでらべあな。うなは爺んごに

に肖るやないぢやい。」

「ダゴダア、ダゴダア、ダゴダア。」嘉ツコはもう走つて垣の出口の柳の木を見てゐました。

それはツンツン、ツンツンと鳴いて、枝中はねあるく小さなみそさゞいで一杯でした。

実に柳は、今はその細長い葉をすっかり落して、冷たい風にはほんのすこしゆれ、そのてっぺんの青ぞらには、町のお祭りの晩の電気菓子のような白い雲が、静に翔かけてゐるのでした。

「ツツンツツン、チ、チ、ツン、ツン。」

みそさゞいどもは、とんだりはねたり、柳の木のなかで、じつにおもしろさうにやつてゐます。柳の木のなかといふわけは、葉

の落ちてカラツとなった柳の木の外側には、すっかりガラスが張つてあるやうな気がするのです。それですから、嘉ツコはますます大よろこびです。

けれどもたうとう、そのすきとほるガラス函ぼこもこはれました。

それはお母さんやおばあさんがこつちへ来ましたので、嘉ツコが「ダア。」と云ひながら、両手をあげたものですから、小さなみそさざいどもは、みんなまるでまん円になって、ぼろんと飛んでしまったのです。

さてみそさざいも飛びましたし、嘉ツコは走って街道に出ました。

電信ばしらが、

「ゴーゴー、ガーガー、キイミイガアアヨオワア、ゴゴー、ゴゴ
ー、ゴゴー。」とうなつてゐます。

嘉ツコは街道のまん中に小さな腕を組んで立ちながら、松並木
のあっちこつちをよくよく眺ながめました。松の葉がパサパサ続
くばかり、そのほかにはずうつとはづれのはづれの方に、白い牛の
やうなものが頭だか足だか一寸出してゐるだけです。嘉ツコは街
道を横ぎつて、山の畑の方へ走りました。お母さんたちもあとか
ら来ます。けれども、この路みちならば、お母さんよりおばあさんよ
り、嘉ツコの方がよく知つてゐるのです。路のまん中に一寸顔
を出してゐる円いあばたの石ころさへも、嘉ツコはちゃんと知つ
てゐるのです。厭あきる位知つてゐるのです。

嘉ツコは林にはひりました。松の木や櫛ならの木が、つんつんと光のそらに立つてゐます。

林を通り抜けると、そこが嘉ツコの家の豆畑でした。

豆ばたけは、今はもう、茶色の豆の木でぎっしりです。

豆はみな厚い茶色の外ぐわいたう套をを着て、百列にも二百列にもなつて、サツサツと歩いてゐる兵隊のやうです。

お日さまはそらのうすぐもにはひり、向ふの方のすゝきの野原がうすく光つてゐます。

黒い鳥がその空の青じろいはてを、なゝめにかけて行きました。お母さんたちがやつと林から出て来ました。それから向ふの畑のへりを、もう二人の人が光つてこつちへやつて参ります。一人

は大きく一人は黒くて小さいのでした。

それはたしかに、隣りの善ぜんコと、そのお母さんとにちがひありません。

「ホー、善コオ。」嘉ツコは高く叫びました。

「ホー。」高く返事が響いて来ます。そして二人はどつちからもかけ寄って、丁度畑の堺さかひで会ひました。善コの家いへの畑も、茶色外そと套すわいの豆の木の兵隊で一杯です。

「汝うないの家いへさ、今朝、霜降つたが。」と嘉ツコがたづねました。

「霜あ、おれあの家いへさ降つた。うないの家いへさ降つたが。」善コが云ひました。

「うん、降つた。」

それから二人は善コのお母さんが持つて来た蓆むしろの上に座りました。お母さんたちはうしろで立つて談はなしてゐます。

二人はむしろに座つて、

「わああああああああ。」と云ひながら両手で耳を塞ふさいだりあけたりして遊びました。ところが不思議なことは、「わああああんああああ。」と云はないでも、両手で耳を塞いだりあけたりしますと、

「カーカーコココー、ジャー。」といふ水の流れるやうな音が聞えるのでした。

「ぢや、汝うな、あの音あ何の音だが覺おべだが。」

と嘉ツコが云ひました。善コもしばらくやつて見てゐましたが、

やっぱりどうしてもそれがわからないらしく困ったやうに、

「奇体だな。」と云ひました。

その時丁度嘉ツコのお母さんが畦あぜの向ふの方から豆を抜きながらだんだんこつちへ来ましたので、嘉ツコは高く叫びました。

「母が、かう云ゆにしてガアガアど聞えるものあ何だべ。」

「西根山にしねやまの滝の音さ。」お母さんは豆の根の土をばたばた落しながら云ひました。二人は西根山の方を見ました。けれどもそこから滝の音が聞えて来るとはどうも思はれませんでした。

お母さんが向ふへ行つて今度はおばあさんが来ました。

「ばさん。かう云ゆにしてガアガアコーコーど鳴るものあ何だべ。」

おばあさんはやれやれと腰をのばして、手の甲で額をちよつと一寸こ

すりながら、二人の方を見て云ひました。

「天あまの邪鬼しやくの小便しよんべの音さ。」

二人は変な顔をしながら黙ってしばらくその音を呼び寄せて聞いてみました。俄にはかに善よコがびっくりする位叫びました。

「ほう、天の邪鬼の小便あ永いな。」

そこで嘉かツコが飛びあがって笑っておばあさんの所に走って行って云ひました。

「アツハツハ、ばさん。天の邪鬼の小便あたまげだ永いな。」

「永ながいてさ、天の邪鬼あいつも小便、垂れ通しさ。」とおばあさんはすまして云ひながら又豆を抜きました。嘉かツコは呆あきれてぼんやりとむしろに座りました。

お日さまはうすい白雲にはひり、黒い鳥が高く高く環をつくつてゐます。その雲のこつち、豆の畑の向ふを、鼠色の服を着て、鳥打をかぶったせいのみやみに高い男が、なにかたくさん肩にかついで大股おほまたに歩いて行きます。

「兵隊さん。」善コが叫びながらそつちへかけ出しました。

「兵隊さんだない。鉄砲持ってないぞ。」嘉ツコも走りながら云ひました。

「兵隊さん。」善コが又叫びました。

「兵隊さんだない。鉄砲持ってないぞ。」けれどもその時は二人はもう旅人の三間ばかりこつちまで来てゐました。

「兵隊さん。」善コは又叫んでからをかしな顔をしてしまひまし

た。見るとその人は赤ひげで西洋人なのです。おまけにその男が口を大きくして叫びました。

「グルルル、グルウ、ユー、リトル、ラズカルズ、ユー、プレイ、トラウント、ビ、オッフ、ナウ、スカッド、アウキイ、テウ、スクール。」

と雷のやうな声でどなりました。そこで二人はもうグーとも云はず、まん円になって一目散に逃げました。するとうしろではないかにも面白さうに高く笑ふ声がします。向ふの方ではお母さんたちが心配さうに手をかざしてこつちを見てゐましたが、やがて一寸おじぎをしました。二人は振り返って見ますとその鼠色の旅人も笑ひながら帽子をとっておじぎをして居をりました。そして又大

股に向ふに歩いて行つてしまひました。

お日さまが又かつと明るくなり、二人はむしろに座つてひばりもゐないのに、

「ひばり焼げこ、ひばりこんぶりこ、」なんて出鱈目でたらめなひばりの歌を歌つてゐました。

そのうちに嘉ツコがふと思ひ出したやうに歌をやめて、一寸顔をしかめました。俄かに云ひました。

「ぢや、うないの爺ぢんごあ、酔つたぐれだが。」

「うんにや、おれあの爺んごあ酔つたぐれだない。」善コが答へました。

「そだら、うないの爺んごど俺あの爺んごど、爺んご取つ換へだ

らいがべぢやい。取つ換へないどが。」嘉ツコがこれを云ふか云はないにウンと云ふくらゐひどく耳をひっぱられました。見ると嘉ツコのおぢいさんがけらを着て章魚たこのやうな赤い顔をして嘉ツコを上から見おろしてゐるのでした。

「なにしたど。爺おぢんご取つ換へるど。それよりもうなのごと山山のへつぴり伯父おぢさ呉けでやるべが。」

「ぢさん、許せゆるせ、取つ換へないはんて、ゆるせ。」嘉ツコは泣きさうになつてあやまりました。そこでぢいさんは笑つて自分も豆を抜きはじめました。

※

火は赤く燃えてゐます。けむりは主におぢいさんの方へ行きま
す。

嘉ツコは、黒猫くろねこをしつぽでつかまへて、ギツと云ふくらゐに
抱いてゐました。向ふ側ではもう学校に行つてゐる嘉ツコの兄さ
んが、鞆かぼんから読とく本ほんを出して声を立てて読んでゐました。

「松を火にたくゐろりのそばで

よるはよもやまはなしがはづむ

母が手ぎはのだいこんなます

これがあるなかのとしこしぎかな。第十三課……。」

「何したど。大根なますだど。としこしぎがなだど。あんまりけ

づな書物だな。」とおぢいさんがいきなり云ひました。そこで嘉ツコのお父さんも笑ひました。

「なあにこの書物あ儉約教へだのだべも。」

ところが嘉ツコの兄さんは、すっかり怒ってしまひました。そしてまるで泣き出しさうになつて、読本を鞆にしまつて、

「嘉ツコ、猫おおれさ寄越せぢや。」と云ひました。

「わがないんちや。厭^やんたんちや。」と嘉ツコが云ひました。

「寄越せつたら、寄越せ。嘉ツコお。わあい。寄越せぢやあ。」

「厭^やんたあ、厭^やんたあ、厭^やんたつたら。」

「そだら撲^はだぐぢやい。いゝが。」嘉ツコの兄さんが向ふで立ちあがりました。おぢいさんがそれをとめ、嘉ツコがすばやく逃げ

かかったとき、にはか俄に途方もない、空の青セメントが一ぺんに落ちたとはいふやうなガタアツといふ音がして家はぐらぐらつとゆれ、みんなはぼかつとして呆あきれてしまひました。猫は嘉ツコの手から滑り落ちて、ぶるるつとからだをふるはせて、それから一目散にどこかへ走つて行つてしまひました。「ガリガリツ、ゴロゴロゴロゴロ。」音は続き、それからバアツと表の方が鳴つて何か石ころのやうなものが一散に降つて来たやうすです。

「お雷らいさんだ。」おぢいさんが云ひました。

「雹ひょうだ。」お父さんが云ひました。ガアガアツと云ふその雹の音の向ふから、

「ホーオ。」ととなりの善コの声が聞えます。

「ホーオ。」と嘉ツコが答へました。

「ホーオオ。」となりで又叫んでゐます。

「ホーオオー。」嘉ツコが咽喉のど一杯笛のやうにして叫びました。

俄にはかに外の音はやみ、淵ふちの底のやうにしづかになつてしまつて氣味が悪いくらゐです。

嘉ツコの兄さんは霜を取らうと下駄げたをはいて表に出ました。嘉ツコも続いて出ました。空はまるで新らしく拭ふいた鏡のやうになめらかで、青い七日ごろのお月さまがそのまん中にかゝり、地面はぎらぎら光つて嘉ツコは一寸氷砂糖をふりまいたのだとさへ思ひました。

南のずうつと向ふの方は、白い雲か霧かがかかり、稲光りが月

あかりの中をたびたび白く渡ります。二人は雀すずめの卵ぐらゐある雹の粒をひろつて愕おどろきました。

「ホーオ。」善コの声がします。

「ホーオ。」嘉ツコと嘉ツコの兄さんとは一所に叫びながら垣根の柳の木の下まで出て行きました。

となりの垣根からも小さな黒い影がプイツと出てこつちへやつて参ります。善コです。嘉ツコは走りました。

「ほお、雹だぢやい。大きぢやい。こつたに大きぢやい。」

善コも一杯つかんでみました。

「俺家おらいのなもこの位あるぢやい。」

稲づまが又白く光つて通り過ぎました。

「あ、山山のへっぴり伯父^{をぢ}。」嘉ツコがいきなり西を指さしました。西根の山山のへっぴり伯父は月光に青く光って長々とからだを横たへました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年10月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

十月の末

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>